

[特別活動]

子どもたちが自身で、企画運営する生徒会運営を目指して

— 「自己肯定感」、「自己有用感」の創出を通して、主体性を発揮する生徒の育成 —

中野 祐輔*

1 はじめに

当校は、田園地域に囲まれた、刈羽三山の一つである八石山のふもとに広がる平野に位置し、自然に恵まれた地域に存在する。また、三世代で生活している家庭も多く、祖父母からも深い愛情を受け、いつも守られ、保守的な生活をしている。しかし、そのような地域の特性からなのか、生徒は与えられた仕事には熱心に取り組むことができるが、自ら新しいことを創造したり、自分から積極的に考えを発信したり、行動したりすることを苦手としている。また、学級活動や生徒会活動においても、教師からの指示を待ち、教師の指示どおりに行動して、満足している傾向が見られる。さらに、生徒会活動においては、前年度踏襲の活動で良いと考えていて、「昨年度、上手くいったからそのままやればいい」といった声も聞こえてくる。

特に、筆者が担任する学校全体のリーダーである3学年の生徒においては、周りの目を気にして、自分を上手く表現することができず、自ら行動することを苦手としている傾向にある。その背景には、自分に自信がなく「自己肯定感」や「自己有用感」が低いことが考えられる。

学習指導要領に示されているように「望ましい人間関係を形成し、集団や社会の一員として、よりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる」ためには生徒の主体的な活動を支援していく必要がある。そのためには、生徒の主体的な活動の土壌となる「自己肯定感」や「自己有用感」の創出が不可欠である。そこで、生徒会活動における様々な評価活動を行い、結果をフィードバックし、反省・再実践といったサイクルを繰り返し、誰かに見てもらえる、認めてもらえるという体験が「自己肯定感」や「自己有用感」の創出につながると考える。

生徒会活動については、荒木(2009)が「評価活動が『生徒の自発的な活動の模索』、『常に向上しようとする姿勢、様々な活動へ挑戦する意欲』につながった」と述べているように、評価が有効であることが分かっているが、短期的なスパン、長期的なスパンでの生徒相互の評価で完結していた。筆者は、生徒の自己評価、相互評価だけではなく、北条地域ならではの様々な地域交流活動における地域の方々からの評価、生徒会を支援する学校職員からの評価も生徒の主体的な生徒会活動の鍵となると考える。本稿では、当校での平成24年度から平成25年度にかけて行った主体的な生徒会活動を目指すための取組における生徒の変容に関する実践研究を述べる。

2 実践上の課題

当校の生徒の課題として、二つの大きな課題があると認識している。

一つは、全校生徒が保育園からほぼ同じメンバーで育ってきているため、人間関係が固定化されていることが挙げられる。互いをよく知りすぎているため『〇〇さんはこんな人』といった固定観念に捉われている場面が多く見られる。また、「自己肯定感」や「自己有用感」が育っていないことから、自分の殻を破れずに、思っていることを口に出せない、行動に移せないという悪いスパイラルに陥っていることが、生徒会活動だけでなく、学級活動や部活動にも現れている。

もう一つの課題は、主体的な生徒会活動に対する生徒の認識が、指導に当たっている教師側の認識と食い違っていることである。当校は平成23年度から学校体制で「主体性」を柱とした生徒会活動の支援を行ってきた。筆者が赴任した23年度は、生徒は「自分たちの手で年間の様々な生徒会活動をやり遂げた」と思っていたが、実際には教師の援助やアイデアで動いていた部分が強かった。例えば、筆者が担当していた給食委員会では、新しい活動を行う上で筆者に

* 柏崎市立北条中学校

『前の学校で何をしていましたか?』などと聞いてくる場面や自分たちで考えたことでも指示を出すまで何も動かないという場面が何度も見られた。また、他の委員会でも新しい活動や従来の活動への改善方を提案する教師に委員長が反発する委員会もあった。そこには、リーダーに選出された生徒でも成功体験が少なく、「自己肯定感」や「自己有用感」が十分に育まれなかったこと、そして、生徒全体が生徒会活動においてやらされ感があり、新しいことにチャレンジする意欲が乏しいこと、「自己肯定感」や「自己有用感」が育っていないため、教師からの指示や上手くいった前例がないと自信をもって行動することができないことが根付いていると考えた。

リーダーである委員長がこれまでも踏襲することをよしとする姿勢で生徒会活動に臨んでいては、主体的な生徒会活動には程遠いと言える。そのため、これらの二つの大きな課題を対処するために、生徒に成功体験を積み重ねさせ、周りの生徒だけでなく、より多くの人間（教師や保護者、地域）から賞賛や感謝、励ましの言葉をもらい、「自己肯定感」や「自己有用感」につなげていくことが有効だと筆者は考えた。その上で、生徒が自主的に考え、実践できる生徒会を創っていきたいと考えた。

3 実践課題の解決の手立て

当校の生徒会は生徒会本部と六つの専門委員会で構成されており、月に1回の専門委員会で1か月の活動反省、今後の活動の企画を行っていた。また、専門委員会での反省の報告、意見交換を行う月1回の代議員会（生徒会本部、各専門委員長、各級長で組織）が行われていた。学校のリーダーが集まり、意見交換を行い、課題に対する今後の方策を話し合うことができる代議員会は、各委員会や学級から出た反省（例えば、当番を忘れる人がいた。発表の声が小さい。など）の各委員個人の反省の報告で完結していた。

また、地域住民との結び付きの強い地域であるにも関わらず、生徒会主体で地域と関わる取組が全く行われていない現状があった。その上、学校として地域と関わる活動においても、生徒はやらされているという意識が強いように感じた。例えば、恒例の「フラワーロード整備活動」でも好意でお手伝いいただいた地域の方と積極的に関わる様子もなく、中には、学校内でサボる生徒までいて、地域の方から酷評された。

生徒の主体的な活動を支援していくこと（時間・場所・職員の指導体制の充実）、生徒の相互評価、職員からの評価の充実と積極的な地域行事への参加からくる達成感をもたせ、「自己肯定感」や「自己有用感」を育てられるように、以下のような手立てを行った。

- ① 各委員会の時間（活動の反省、他委員会への意見・要望、活動の企画）の確保・充実
⇒今年度より、定例の月1回の専門委員会の時間以外に「生徒会の日」を設けた。委員会の時間が建設的な話し合いをすところまでいかず、委員会の日常活動の反省のみで終わることが多かったため、時間を確保することと委員長への指導を行うことで自分たちだけの反省に留まることなく、他委員会へも目を向けることで生徒の相互評価の充実を図り、評価を生かして新しい活動についての話し合いまで進めることを目的とする。
- ② 代議員会の内容改善（評価内容の共有、改善の方策、新たな活動内容の議論）
⇒平成24年度より、委員会の反省の報告のみで終わっていた代議員会の質的な向上を図った。
「委員会を出た他委員会への意見・要望を伝え合う→代議員会で改善策を話し合う→委員会へ持ち帰り、改善する」というサイクルを徹底した。各委員会から新しい企画の提案を行い、全員で話し合うことで、主体的に委員会活動を進める意識の向上を目的とする。
また、生徒会全体への職員からの評価の共有のため、委員会を担当する職員への積極的な代議員会への参加を働きかける。（働きかける前は、代議員会へ参加する職員は生徒会本部担当の職員のみであった。）参加職員すべてからの指導・講評の時間を設け、職員からの評価の充実を図る。
- ③ 生徒会主催の地域交流活動の企画・運営
⇒平成23年度まで、学校主体で呼び掛け、参加してした地域行事を生徒会主体で呼び掛け、進めるというスタイルに変更した。やらされている行事ではなく、自分たちで進める（主体性の伸長）という意識を高め、達成感を得ることができた。また、主体的な活動により、生徒相互、職員からの評価にプラスして、地域からの感謝や賞賛、励ましの声を次の活動への意欲につなげることができた。
平成25年度は、生徒会役員選挙で候補者が公約として掲げた「積極的に地域に貢献する」に着目し、「何のために、いつ、誰と、どうやって行うか」、道具・予算も含めて企画をさせ、実行させる。地域の将来や高齢者、困っている人のために考え、実行することで、地域の将来を担う若者としての責任感を高めるとともに、自分が役に立ったという「自己有用感」につなげることができる。

なお、データは平成23年度から25年度までの生徒会活動で行ったものを用いた。

4 実践の成果と考察

(1) 各委員会の時間（活動の反省、他委員会への意見・要望、活動の企画）の確保・充実

筆者が赴任した平成23年度は、専門委員会の活動時間は月末に1回設定されているのみで、内容は、一、1か月の活動の反省、二、次の月の活動予定、三、日常活動、四、その他（他委員会への意見・要望）の4点を話し合うのみで終了していて、反省で出る意見は全委員会で共通して「当番をさぼる人がいた。」「当番を忘れる人がいた。」などの委員への批判や失敗の揚げ足をとるような意見や「放送で囃んでしまった。」「声が小さくて、先生に注意された。」などの個人的な反省で完結していた。その上、委員会で話し合っ出された反省に対する改善の方策を議論し合うこともなかったため、毎回、同じ反省しか出すことのできない委員会がいくつもあった。四に関しては、どの委員会でも「とくになし。」ばかりであった。他の委員会に目が向かなかったこと、意見を言うことで人間関係が崩れるのを恐れたことの2点が原因と考えられる。

また、委員会の活動に時間的な制約があり、新しい活動について議論し合う時間もなく、例年どおりの活動から脱却できずに前年度踏襲の同じ活動を見直すこともなく、繰り返していた。特別な活動の企画が入ってくると、活動の反省も中途半端に終わってしまっていた。定められた時間での不足分を埋め合わせるために、休み時間や放課後を使って自主的に集まって活動することも皆無であった。

そこで、不十分な委員会の反省・評価の改善、反省以外の委員会独自の活動（特別活動や新しい活動の企画）のための時間の確保のために以下の方策をとることにした。

① 活動反省・評価の項目の改善

年度当初に委員長への指導を徹底し、委員会の自己評価としては、委員会の活動反省・評価は個人的な反省ではなく委員会全体の反省を出すこと、反省点については改善の方策まで話し合うこととした。（同じ反省ばかり続くことをどうすれば変えることができるかを生徒に投げ掛けたところ生徒が級長を中心に学級討議の中で自然に行っていたこと）また、相互評価としては、他の委員会の活動をよく観察し、続けてほしいこと、改善した方がいいことについても必ず話し合うこととした。その際、改善すべきことについては、失敗への批判や揚げ足とりにならないよう、建設的な意見を述べることを徹底させた。結果は図1に示したように、「かんでしまった。」「声が暗かった。」などの個人的な反省は見受けられるものの、「次回は気を付ける。」のような建設的な意見とまではいかないが、平成23年度には見られなかった今後、改善するためにどう行動するかまで話し合うことができるようになった。改善策の出し方についても今後見直していく必要がある。

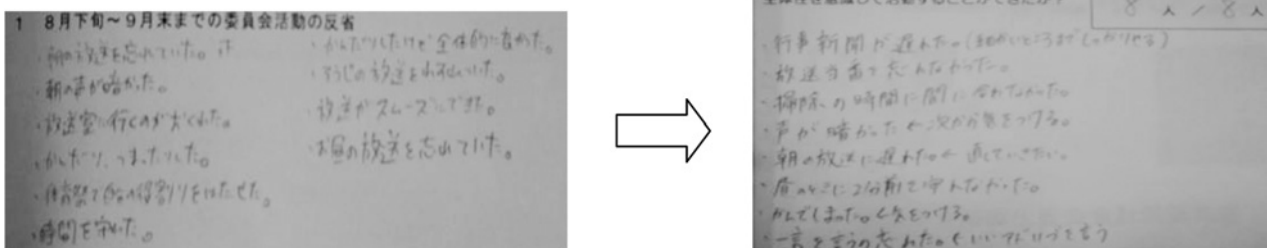


図1 各委員会の反省の変容（広報委員会：左23年度、右25年度）

② 「生徒会の日」の設定

定例の専門委員会の時間が活動反省のみで終わってしまい、各委員会独自の新しい活動へのチャレンジがしにくい実態があったため、平成25年度より、ノ一部活デーで会議のない月曜日に各委員会独自の活動を行う「生徒会の日」を設定した。話し合いを行うことができる時間を確保し、現状の活動・例年どおりの活動に満足せずに、新しい挑戦をするよう委員長へアプローチした。年度途中のため、成果が出ているか評価しづらい部分もあるが、応援団主催の「委員会ごとの地域でのあいさつ運動」、整備委員会主催の「エコキャップ運動」などの取組も前期前半から動いている。実施はされていないが、計画されている企画がいくつも控えているため、生徒の主体的な生徒会活動が進むことが予想される。

「生徒会の日」設定に関する生徒の声

・いつもの専門委員会以外の時間が増えて、生徒朝会での今までにないイベントの準備ができてよかった。

「生徒会の日」設定に関する職員の声

・話し合いをさせる時間が増えて良かった。・定例以外に集まれる時間が少なかった。(実施できなかった月もあるため)

(2) 代議員会の内容改善（評価内容の共有、改善の方策、新たな活動内容の議論）

従来の代議員会は、各専門委員会で話し合った活動反省を報告するだけの代議員会とは名ばかりの報告会であった。反省の報告のみでは評価の共有とは言えず、改善点を話し合うことをしないため、リーダーである専門委員長の自覚・責任が育たず、委員への指導が徹底できず、毎月同じ反省が繰り返される悪いスパイラルに陥るばかりであった。それが、活動のマンネリ化、変化を恐れる前年度踏襲から脱却できない原因としても考えられた。

そこで、代議員会にリーダー同士が各委員会の自己評価を共有し、改善の方策を話し合い、実践につなげていく機能をもたせる必要があると考えた。「先生に言われてやるのではなく、自分たちで考えて、実践できた」という経験を積むことが、主体的に生徒会活動を進めるための意欲につながると考え、以下のように代議員会にテコ入れを行った。

① 代議員会のシステムの変更、改善

平成24年度の終盤、現3年生に代替わりした当初から次年度へのよいスタートが切れるよう、代議員会は、報告の場ではなく、「学校生活・生徒会活動をよりよいものに変えていくための話し合いの場」、「各委員会からの提案について話し合って、決定していく機関」であるということを経営的に指導した。

前項で示したように、専門委員会での反省の際に、改善の方策まで話し合わせた。その結果を代議員会の場で委員長に発表させるようにした。その後、他のリーダーから意見をもらう活動を計画した。改善策が不十分な委員会に対して、積極的に意見を交換する姿が見られた。また、他の委員会への意見・要望について専門委員会の時間で話し合わせた内容も発表させた。前項にも記述したが、平成23年度からの2年間は、代議員会にて他の委員会へ要望が出されることはなかった。25年度も、5月に行った第1回の代議員会では、「風紀委員会の一部の人が、腰パンをしている。」という意見のみであった。その後も、生徒会本部からの呼び掛け、生徒会担当からのアプローチを継続的に行った。その結果、6月の第2回代議員会では、「あいさつ当番で座っている人がいる。」、「朝の放送が暗い。」などの問題点の指摘のみの意見ではあるものの、意見・要望を出す委員会が増えた。7月の第3回代議員会では、「体育祭（軍集会）の服装チェックは風紀委員会にやらせてほしい。」、「自転車の鍵チェックをやったほうがいい。」、「体育祭での担当競技の助っ人を他の委員会にお願いしたい。」など数が増えただけではなく、今後の委員会を前向きにとらえているような意見・要望が出せるようになった。「学校生活をよりよくする」という目標のもと、意見を出し合う代議員会を積み重ねることで、建設的な意見を出せるようになるだけでなく、固定された人間関係の中で、「嫌われるのが嫌だから」と自分の本音を口に出して話し合う活動を苦手としていたリーダーの変容が見られた。

以上のことから、「相互評価をし、共有する場を設定すること」、「伝え合う機会の設定」、「伝えやすい雰囲気づくり」が、生徒に前向きで主体的な生徒会への参加意欲を湧出させるには有効であると考えた。

② 職員への主体的な生徒会支援に向けた働きかけ

委員会を担当する職員と話をする、必ずと言っていいほど「つい生徒会の活動に口を出してしまう。」、「生徒にやらせるより自分でやったほうが早いし、楽だ。」という声が聞かれる。職員の話ももったもなことだが、そのままでは生徒は、自分で考えて行動するのではなく、職員の指示を待ち、指示に従うのみで、主体性を伸ばすことはできない。当校の生徒が指示待ちの生徒会活動を行っていた原因は、職員の支援体制にも起因していると考えた。

そこで、25年度の年度当初に委員会担当職員へ「どんなに時間がかかっても、できる限り生徒に考えさせること」、「各委員会の活動が単純な例年どおりの活動にならないよう支援すること」、「例年どおりの活動を行うにしても、生徒にねらいや目的を今一度、洗いなおさせること」をお願いした。その結果が、専門委員会の活動のみならず、体育祭の実行委員会（職員+生徒会本部で組織）の話し合いの中でも生かされた。ルール作り、競技内容の審議などにおいて、生徒の意見を生かすために生徒と職員が時間をかけ、細部まで計画することができた。全職員体制で生徒の意見を生かすという共通認識ができつつある。実行委員の生徒からは、「先生方が、自分たちの考えをつぶさないで、生かしてくれて嬉しかった」との声が聞かれた。指導に当たる職員の「生徒の意見を引き出して、実行させてやる」という姿勢が、生徒の意欲につながったと考える。

また、代議員会に参加する職員が生徒会担当の職員のみという現状があった。生徒の主体的な生徒会活動に向けた話し合いを励まし、評価をしてもらうことで、「先生方は自分たちの活動を見てくれている、認めてくれている」という

安心を感じさせることにつながり、生徒の意欲をより高めることができると考えた。そのため、職員会議や学校評価を利用して、職員の代議員会への積極的な参加の呼び掛けを行った。

〈職員体制の変容〉

- ・参加・指導に当たる職員数は9月の段階で、4人まで増えた。(4月～7月の参加職員は2人のみであった。)

〈職員体制の変容に対する生徒の声〉

- ・先生方からいろいろな面でのアドバイスをもらえて嬉しかった。
- ・先生からのアドバイスを聞いて、次は同じ反省が出ないようにしたい。

(3) 生徒会主催の地域交流活動の企画・運営

当校の生徒は地域柄なのか、地域の行事に参加することが多い。(学校として参加するというよりも、「地域の子ども」として参加することが多かった。)生徒からは「本当は参加したくないのですが仕方なく。」や「親が参加しろと言うので、参加します。」などのマイナスの発言が聞こえてくる場面もあった。地域の大人やお年寄りからは、生徒の活動に対して感謝や賞賛の言葉をいただいていたが、肝心の生徒にはやらされ感があったために心には響いておらず、活動意欲の向上にはつながってはいないという現状があった。そこで、学校体制で行っていた地域交流活動に企画段階から生徒会の声を入れ、受動的な参加から能動的な参加へと変えること、本部役員生徒の公約を生かし、独自の地域貢献活動を企画・実行することの2点で、生徒の主体的な地域活動に変えていくことができると考えた。そうすることで、地域からの声、肯定的な評価が「地域の人の役に立てた」という有用感につながり、より主体的な生徒会活動につながっていくと考えた。

① 今ある地域活動に生徒会を参入させる

図2に示すように、当校では、「きたじょう絆プロジェクト」として4つのプロジェクトを学校体制で小学校・地域と連携して行っている。そのうち、「笑顔いっぱいプロジェクト」、「北条秋まつりプロジェクト」の2つに焦点を絞って、生徒会主体で推進していくこととした。

「笑顔いっぱいプロジェクト」では、地域住民と小中学生、教職員合同のあいさつ運動や花いっぱい運動を進める計画である。今まで、担当職員主導で進めていた地域の老人会と合同での「フラワーロード整備活動」を整備委員会の生徒が担当職員と話し合いを進めながら行った。運営側の整備委員会のメンバーだけでなく、全校生徒の意欲的な活動が見られた。その姿を老人会の代表者からも評価され、「一昨年は30点、昨年は120点、今年は200点」との言葉をいただいた。担当の整備委員会のみならず、他の生徒の「自己肯定感」や「自己有用感」を高める契機になったようである。直後の代議員会でも整備委員会に対して、賞賛の言葉や「司会の声をもう少し大きくするだけで、みんなに作業の手順がよく伝わる」と言った前向きな意見も出ていた。

「北条秋まつりプロジェクト」では、中学校の文化祭を地域のコミセン祭りと合同で行うというものである。コミセン祭りに関しては、23年度までは生徒の有志が参加、24年度は全校生徒がスタッフとして参加、25年度は、「地域とともに歩む学校」に向けて連携をより深め、地域に元気を出してもらうことを目的に文化祭と合同で行うこととなった。24年度は、生徒会本部がコミセン職員との打ち合わせを行い、コミセンからの企画にアイデアを出し合った。当日は委員会ごとにチャリティーバザー、じよんのび広場などのブースを担当し、子どもやお年寄りに楽しんでもらえるような活動を行ったり、食べ物の屋台の手伝いを行ったりした。生徒たちの感想から一部抜粋して記述する。

- ・文化祭と時期が重なって、大変だったけど、生徒会として地域の人と一緒に活動できてよかった。また、地域の人からほめてもらったりして嬉しかった。
- ・屋台を手伝うときに、大変な人と仕事がない人がいたので、来年は分担や時間をしっかり決めたい。

地域からの声を嬉しさとして感じ、次年度への意欲を高めることができた生徒がいた。主体的な活動に対する地域からの評価が生徒の「次は〇〇してみよう」という意欲、主体的な生徒会活動を進める意欲につながったと考える。

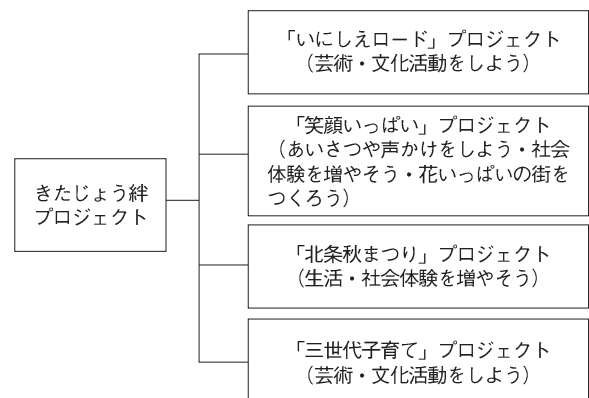


図2 「きたじょう絆プロジェクト」組織図

25年度は、生徒会本部の発案で、来場者（子ども、お年寄り、地域の方）に楽しんでもらうことを目的に「委員会ごとに普段の委員会活動に関わるブース」を運営することに決め、委員長を中心に企画・運営をすることができた。

② 生徒の公約を生かした独自の地域貢献活動の企画・運営

現3年生の生徒会本部役員は、ほぼ全員が昨年度の生徒会役員選挙において、公約として「積極的に北条地域に貢献する活動をしたい」と述べた。そこで、年度当初から担当職員から提示するのではなく、一から企画を進めるべく話し合いを進めさせてきた。「自分たちが公約として演説したことを自分たちの手で一からやりとげる」経験がリーダーとしての責任感の醸成にもつながると考えた。リーダー生徒の公約として「お世話になった地域の方への年賀状」、「街頭での地域の方へのあいさつ運動」を行った。お世話になった地域の方への感謝の気持ちを行動で示すというコンセプトで公約に掲げた当該生徒だけではなく、生徒会本部生徒全員で話し合いを重ね、企画から実行まですることができた。文化祭での取組も含め、地域からは「中学生から元気をもらえた。」などの感謝の言葉をもらうことができ、生徒も「大変だったが、頑張ってよかった。」と今後の意欲につなげることができた。

実践の(1)～(3)を踏まえながら、毎月の専門委員会の時間に委員会ごとに主体的な活動に関する評価を行わせている。表2には、月ごとの各委員会の数値の変容を示す。

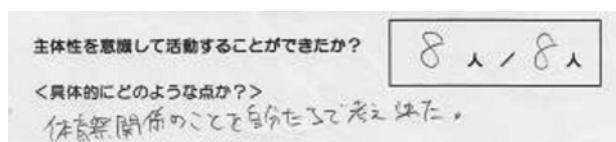


図3 主体性に関する評価項目

	6月	7月	8・9月	10月
生徒会本部	5人/8人	8人/8人	7人/8人	8人/8人
風紀委員会	7人/7人	7人/7人	5人/7人	6人/7人
給食委員会	6人/8人	8人/8人	8人/8人	8人/8人
保健委員会	6人/7人	4人/7人	6人/7人	7人/7人
図書委員会	6人/8人	6人/8人	7人/8人	4人/8人
広報委員会	8人/8人	0人/8人	5人/8人	7人/8人
整備委員会	0人/8人	6人/8人	7人/7人	7人/7人

表2 月ごとの主体的な活動に関する評価

表2に示したように、生徒会本部や整備委員会のように、活動が周りから評価されることで意識が向上している委員会もあるが、広報委員会のように生徒朝会の運営に関して大きな失敗をしたと感じて、大幅に評価を下げた委員会もあった。自己の良くない評価を補い、次へ向かわせるための相互評価や職員からのフォローの場の設定の必要性を感じた。

5 研究の課題

本実践については今まで述べてきたとおり、①生徒の相互評価により、委員会の活動を改善する方策を考えることができるようになったこと、②代議員会が、建設的な意見を出し合い、議論できる場になり、様々な活動を考え、提案することができるようになったこと、③積極的に地域へ貢献したいという気持ちが高まり、地域の声が「〇〇をやってみよう」という意欲につながったこと、などの効果が認められた。しかし、その反面、課題も見つかった。

課題の一つ目は、委員会での話し合いに一部生徒が参加できていない部分も見られたことである。1年生の自己表現が苦手な生徒などは、話し合いの際に積極的に声を出すことができず、黙ってしまうという反省が委員長から寄せられた。口に出すのが苦手な生徒でも自己表現ができるよう高橋（2012）が行ったようなショートスパンでの自己評価、相互評価シートの導入も必要であると感じる。

課題の二つ目は、評価のマンネリ化を起ささないようにすることである。同じ評価項目で評価を続けていったときに、同じような評価を周りからされ、委員の改善意欲の減退をさせることも予想される。評価項目の見直し、委員会ごとの評価方法の見直し等の改善が必要になることも予想される。

参考文献

- 荒木 充 「評価活動を生かした生徒会活動の取組について」『教育実践研究』第19集，上越教育大学学校教育実践研究センター，2009年，159～164pp
- 高橋淳一 「ショートスパンの相互評価を生かした生徒会活動の取組について」『教育実践研究』第22集，上越教育大学学校教育実践研究センター，2012年，243～248pp
- 文部科学省 『中学校学習指導要領 特別活動編』